

相互動詞「～あう」の相互的な動作の種類

木村静子

要旨

本稿では接尾辞「～あう」がついた相互動詞の意味と用法を、姫野（1999）の枠組みを基本として、相互的な働きかけがあるかどうかで大きく二つに分け、それを同時・交互・繰り返りという時間に下位分類した後、その意味特徴をかんがえたものである。

キーワード：相互的な働きかけ・同時・交互・繰り返し

1 はじめに

姫野（1999）は相互動詞「～あう」の意味と用法を時間・働きかけの対象・意味特徴の大きく三つに分け、それらを以下のように細分化している。（意味特徴については割愛する。）

時間：1 両者が同時に働きかける

2 両者が交互に働きかける

3 文脈によって同時だったり交互だったりする

働きかけの対象：1 相互に働きかける

2 同一の対象を相手にする（これを共同動作と名づけている）

3 相互的な働きがなく、主体者がそれぞれ同じような働きをしている（これを並行動作としている）

本稿では上記の枠組みを基本とし、相互動詞「～あう」を、相互的な働きかけがあるかないかで大きく二つに分け、それを時間によって分けた後、その意味特徴を考えた。働きかけと時間との関係は以下の通りである。

相互の働きかけの有無		時間
働きかけがある	1 相互の働きかけがある	1 同時 2 交互 3 くり返し
	2 両者が同一の対象に働きかける	1 同時
働きかけがない	2 それぞれが同じ動作を行っている	1 同時 2 交互

時間に関しては、同時・交互・くり返し、というのがどの場合にも可能なであろうが、集めた文例にはなかったので、上記の表のようになった。

ところで、本稿では「働きかけ」ということを、相手に向かって行動をとること、とした。例えば、「殴る」、「ぶつかる」などは肉体的に働きかけているものであり、「相手を許す」「相手を認める」などは精神的に働きかけているものだと思う。しかし、ヒトとヒト、ヒトとモノ、モノとモノの場合などがあるし、また、働きかけがある、とした場合にも上記の「殴る」「ぶつかる」は相手への働きかけがはっきりと表われていて、働きかけ度が強いが、「相手を用心する」などは働きかけ度が弱いように思われる。

以下、上記の分類に従って、用法と意味を見ていくことにする。

文中、主語と「～あう」のついた動詞には下線を引き、相手を表しているもの、または相手がいることを示している語には点線を引いた。

なお、文例は小説から収集した。

2 「～あう」の用法と意味

A 働きかけがあるもの

A-1 両者、あるいは二つ以上のモノ・ヒトが相互に働きかけているもの

A-1-1 両者の働きかけが同時であるもの

① 両者の働きかけが物理的であるもの

①-1 モノとモノとが直接働きかけあうもの

以下の動詞の主体は非動作主なので、厳密な意味で「働きかける」と言えないのかもしれないが、動詞自体は相手へ働きかけているものなので、ここに分類した。

(1) 森はざわめきだした。池辺の樹の枝々は触れ合った。(金閣寺)

(2) 主砲が思い思いに火を吐き、風圧が逆巻き衝突し合って艦上の空気をふるわせた。

(戦艦)

(3) 翌八日、ほぼ同勢力の日米の空母同士は、文字通り真向からぶつかりあった。

(榆家)

以下の「交戦しあう」というのはヒトとヒトとの戦いととれるが国と国との戦いとして、ここに分類した。

(4) もはや戦乱もひさしい、今後、他国と交戦しあうことをやめようということである。(国盗り)

①-2 ヒトとヒトとが 直接働きかけあうもの

以下はヒトとヒトとが直接に働きかけあうものである。

(5) たとえば酔っぱらい同士で絡みあって、その際、写真の受け渡しがあったにちがいない。(上野)

(6) その背に抱きつきながら、おれはやつの腹に、もう一度匕首を突っ込んだ。そして、もつれ合って、一緒に転んだ。(人殺し)

(7) 僕は、やはり彼らから離れて孤立していたが、彼らと肩を叩きあい、声高に話し

あいたい気持でいっぱいだったのだ。

(他人の)

(8) その石の上には、今手に手に松明を持った、三郎が手のものが押し合っている。

(山椒)

(9) 屈強な男三人を相手に、源次は一步もひかずに殴り合い、血だらけになりながら、三人を地面にのしてしまった。

(驟り雨)

② 観念的に同時に働きかけるもの

動詞は物理的に働きかけることを表しているのであるが、文脈より、実際に働きかけるのではなく、観念的に働きかけることを表しているものである。主体はヒトの場合もモノの場合もある。以下は主体がヒトのものである。

(10) 高等学校の友情なんて、もっと conventional なものじゃないかしら。お互いを尊重し、お互いに傷つけ合わない、それだけのもの……。

(草の花)

(11) 江戸時代からズーッと、この町はみんなが肩を寄せあって、助けあって、それでなんとかやってきたんだよ。

(上野)

以下は主体がモノの例である。

(12) 当然と当然がぶつかって、殺しあうのも当然だ。

(友情)

(13) 現代と前近代が、こちんまりとうまくまとまるではなく、むしろ火花を散らして対決し合ってるほうが金沢の未来には望ましいのだ。

(風に)

③ 両者が物理的に働きかけた結果、ある一つの状態になっているもの

これはヒトとヒトとの働きかけであり、相互に働きかけた結果一つの状態になっているとみなされるものである。

(14) 汗に濡れた裸の腕をくみあって黒人の兵士が、ゆっくりやってきた。

(戦いの今日)

(15) 二人はそんなことは考えもしなかった。これで助かった、もう死ぬ心配はないということだけで、抱き合って泣いた。

(さぶ)

(16) (略) 私達はそんな最初の日々のような慕わしい気持で、肩を押しつけ合ったまま、佇んでいた。

(風立ちぬ)

(17) 二人は手を握りあったまま、しばらく黙って歩いた。

(驟り雨)

(18) 私たち三人は手をつなぎあって波止場の山下公園の方へ行ってみる。

(放浪記)

④ 相手との関係を表しているもの

相互に精神的に働きかけているのだが、相手とどのような関係であるかをあらわしたものの。

(19) ある時、おとなとせり合ったが、その時も、とうとうおとなを負かしてしまった。

(路傍)

(20)聖公会のグループが志方の家に近い利別教会に集まることを忌避したことから対立は急速に拡がり、二派は完全に反目しあうことになった。(花埋み)

(21)(略)互いに夫の冥福を祈りながら、手を握り合い慰めあって強く生きてゆくことを誓いあったと、ある未亡人はその頃の私信に書いている。(妻たち)

(22)横綱を祭りあげる儀式の脇役であった弱い者同士が、互ひにかばひあったって、気がつかないふりをしているのが粹な態度だらう。(男の)

(23)そうしなくちゃ、外の社員たちがお互いに疑り合ってなきやならなくなるわよ。(女社長)

(24)話の途中で、横山は尾形久万喜と眼を見かわしたり、うなずき合ったりした。(蟬しぐれ)

(24)は「うなずき合う」ということで、互いに同意を求めているということであり、相手に対して自分の態度を表明しているものである。

⑤ 両者が話す類のもの

両者が話すことを表すものである。動詞の種類は少ないが、例は非常に多かった。

一人で話している場合は必ずしも相手を要求しないが、接尾辞「あう」がつくことによって、相手がいることが表されている。

(25)全く、剛と冗談を言い合っていると、ふつか酔いも直る気がする。(言い寄る)

(26)近所の手伝い女房達は聞こえよがしにささやき合ったが、ゆみはそれにも口惜しい気持を起さなかった。(向い風)

(27)弁当を使いながら、女中と冗談口をききあうこともあった。(驟り雨)

(28)出入りする客はなにごとだろうとうわさしあい、銀行はなんとか引き取ってもらいたくなる。(人民は)

⑥ 両者が同時に相手を見ることを表しているもの

(29)七人の娘は可哀らしい、黒い瞳で顔を見合った。(杯)

(30)僕はふりかえり、教員と短い時間、顔を見つめあった。(人間の)

(31)白玉を食べ、茶をのみ、意次と小兵衛と三冬が、なごやかな視線をかわし合った。(剣客)

⑦ 両者が対面するもの

相手に対する働きかけ、ということを考えて、「ぶつかる・なぐる」などは働きかけがはっきりと出ているが、「会う」類の対面する動詞は働きかけ性が弱いように感じられる。しかし、対象に向って動作を行なうということではやはり働きかけがあると言えるの

だと思う。

両者が同時に対面するものには、前もって約束していて対面するものと、偶然に対面するものとの両者があるが、偶然に対面するものは働きかけがないとして、ここには分類しなかった。

(32)和田が鶯谷ヴィラハウスの居住者ではないとすると、蛭谷と和田は七階のどこかの部屋で、落ち合っていたのかもしれない。 (上野)

⑧ 相手に対する感情を両者が同時に表すもの

これは相手に対する自分の感情を表すということで、相手に働きかけているとした。

(33)じゃ君は、誰か信仰のある人と愛し合えばいいさ。僕のような惨めな人間を愛することなんかないさ。 (草の花)

(34)二人は逃げた一人のなかまを呪い、そのなかまを一人で出してやったことで、互いに相手を責めたり憎みあったりした。 (さぶ)

(35)勿論、ある時は、お互に手きびしく批評しあって腹を立てあったこともあったが、すくなくって、反って相手の云うことが尤もだと気がついてあとで心のうちで感謝し、なお友情のますのをおぼえた。 (友情)

(36)平戸の松浦隆信候には四人の側室がおられたが、この側室たちが、たがいに妬みあい、争いがたえぬ。 (沈黙)

⑨ 両者が同時に相手から離れることを表しているもの

両者が同時に相手から離れて行くことを、相手への作用として、ここに分類した。

(37)互いに互いと衝突しては打ち合い、逃げ合い、たちまち軍組織が崩壊した。 (国盗り)

(38)登場人物は名前のない青年と名前のない少女とで、この二人は或いは一緒に旅に行き、或いは遠く離れ合って心に相手のことを想い合った。 (草の花)

(39)警察署の調室でも、病院の待合室でも、彼らはつねにいっしょになるのだが、両方で目をそむけあっていた。 (点と線)

A-1-2 両者、あるいは二つ以上のモノ・ヒトが交互に相手に働きかけるもの

① 両者、あるいは二つ以上のモノ・ヒトが物理的に交互に働きかけるもの

(40)二人は酒をつぎ合い、煮こごりのついた鰯の頭の煮つけをつついた。 (蝉しぐれ)

(41)彼らは暗がりをつかしておたがいに声をあげ、それを目あてにボールを投げあった。 (裸の)

(42)お互いの写真を撮り合ってから住所の交換をした。 (数学者)

(43)「鳥海山よ、課長さん」「そうか、鳥海山か、あれが」と互いに地図を見ながら教

えあい、二人とも未知の異郷だけに見るものごとく、目を奪われる。(中年)

② 両者、あるいは二つ以上のモノ・ヒトが観念的に交互に働きかけるもの

(44)まず、サムソンは新聞を空想でみたした。特等、宇宙旅行服一式。一等、帽子と銃。(略)ヘルクレスはこれに対して正面から挑戦した。彼らはポケット猿を先頭にリス、アンゴラ兎、モルモットの順で商品をならべ、期間中は動物園で子供劇場を開催するというのだ。(略)。この二社はたがいに航跡を追いあい、四つに組んですきを狙いあった。(巨人)

(45)その時分、私の胸には失望と愛慕と、互いに矛盾した二つのものが交る交る闘ぎ合っていました。(痴人の愛)

「せめぎあう」は互いに争いあうということで、動詞は物理的に両者が同時に働きかけるものであるが、文脈から実際に働きかけるのではなく、観念的に働きかけていることがわかる。また、「かわるがわる」という語があることによって、両者が交互に働きかけるということもわかるものである。

③ 互いに連絡を取りあうことを表すもの

(46)そこで三日か四日身を隠して、大阪にいる友人と連絡を取り合い、今後のことを検討しようと思ったのです。(錦繡)

(47)あの負傷が原因で、夫婦としての最後の頁を心をこめて綴り合えたのでございます。(妻たち)

(48)しかし、心の中では、源氏が忘れられず、ひそかに文を通わせあっている。(新源氏)

(49)はある程度の期間、両者が交互に働きかけあうことを表している。

④ 交互に話すことを表すもの

(50)しかし、それは、純事務的に運ばれ、部内人事に関して、互いに何か思っているも、耳打ちしあうというような事は、一切無かったという。(山本)

⑤ 精神的に交互に働きかけあうもの

(51)六條院の朝夕は、この世のものならぬ豪華な悦楽にみちていた。紫の上と中宮はむつまじく、手紙のやりとりに友情を交し合っていた。(新源氏)

「友情を交し合っていた」というのは同時に相互に働きかけていると考えられるのだが、「手紙のやりとりに」という句があるので、交互に働きかけるとした。

A-1-3 相互の働きかけが繰り返し行われるもの

相互が同時に働きかけ、それが繰り返し行われているもの

(52) つたわってくるその弦の音は、しずかにひびきあって、ちょうど熱帯の花にふりそそぐ細い雨のようでした。 (ビルマの豎琴)

(53) 水の波紋のように、中心から外にむかって、ゆっくりと輪をかきながら広がっていく。鈍いうずきが、骨から骨へと共鳴しあって、いっかな止みそうにない。

(砂の女)

(54) 吸入された空気が彼女の鼻の奥でぶつかりあい反響しあい、わずかの間隔をおいて、今度は吐きだされた息が彼女の喉でごろごろと鳴動し、ときにはははっとなって寝床から逃げだしたくなるほどの、圧倒的な、おしつけがましい、にぶくしんだ咆哮となった。

(楡家)

(55) ヴェランダで、藤木さん？と明るい声が繰り返し、木霊のように、藤木さん、藤木さん、と言い伝える声が家の中で幾つも呼びあった。

(草の花)

以下の「連なりあった」は、飛行機が進むにつれて次々と煙が出、それが結果として連なりあっているの、次々と雲が出ているところを取り上げて、ここに分類したが、「連なりあった」という状態をとらえて、Bの「働きかけ性のない動作を両者が同時に行ない、その結果が一つの状態になるもの」というところに分類されるのかもしれない。

(56) 高射砲が花火の炸裂するような音を立て、飛行機のを追ってむくむくした煙が小さな芽キャベツのように連なり合った。

(草の花)

以下はある程度の期間交互に働きかけているのだが、その働きかけが習慣になっているものである。それは「毎日」ということばや「月に一度は」ということばからわかる。

(57) 私達は毎日訪ね合ったり、一緒に散歩したりするようになりました。 (Kの)

(58) 弟の芳二郎はいま十五歳になるが、軀が弱いので玉川在の農家に預けられていた。

平左衛門というその農家はかなり田地持ちで、妻女お由とは縁続きであり、月に一度は互いに往来しあっている。

(さぶ)

B 相互の働きかけがないもの

相互間の働きかけがないものであり、同一の対象に向かって両者で働きかけるものと、それぞれが同じ動作を行うものの二つに分類される。

B-1 同一の対象にむかって両者で行動するもの

ある対象にむかって両者が働きかけるものであるが、用例はすべて両者が同時に働き

かけるものであり、交互や繰り返し働きかける用例は見当たらなかった。

① 対象にむかって両者で同じ動作をするもの

物理的に対象にむかって両者で働きかけるもので、両者間の相互性はないものである。従って、主体の交替も不可能である。

(59)二人は包丁を奪いあって縫れた。 (冬の旅)

(60)それぞれの四角形は、大小の差はあるが整然と並んでいる。互いに押合ったり、場所を取合ったり、隣接の四角に攻め込もうと隙を窺ってはいない。 (砂の上)

以下の例は「彼女の父」という対象にそれぞれが責任を押しつけているものであり、精神的に働きかけているものである。

(61)そんな風に冗談でも言い合うように、私達はお互に相手の気持ちをいたわり合うようにしながら、一緒になって子供らしく、すべての責任を彼女の父に押しつけ合ったりした。 (風立ちぬ)

② 対象を両者で二分するもの

これは、両者で一つのものを分けるものである。両者間の働きかけはないが対象にむかっての働きかけはある。

(62)私はお前たちのその痛さと苦しみをわかちあう。 (沈黙)

(63)五人の親子はどんどん押寄せて来る寒さの前に、小さく固まって身を護ろうとする雑草の株のように、互いにより添って暖みを分かち合おうとしていたのだ。

(小さき)

(64)野村さんと握り飯を分けあって食べる。 (放浪記)

③ 対象を両者で共有するもの

一つのものを両者で共有するものであり、相互の働きかけはない。

(65)太郎はそこで、戸次さんに紹介され、最初から、お互いに秘密を持ち合ったような挨拶を交した。 (太郎物語)

「お互いに秘密を持ちあう」というのはそれぞれがそれぞれの秘密を持っているのではなく、二人が共通の秘密を持っていると解釈した。

B-2 両者が同じ動作を行なうもの

B-2-1 働きかけでない動作を両者で同時に行なうもの

相手への働きかけがない、独立した同じ動作を両者が同時に行うものである。

① 働きかけでない物理的な動作を両者が同時に行なうもの

相手に対して働きかけるのではない物理的な動作を両者が同時に行なうもの。

(66)二人の少女は葡萄をもぎりあって珊瑚色の唇に運びながらたのしそうに微笑みかわしている。 (女坂)

(67)盃が座をめぐり、おのおの、絶句の詩など作りあい、月はなやかにさし出るころ、
管弦のあそびがはじまった。 (新源氏)

(68)同僚に「お早う。」といい、お互に指を三本出しあって、クックッと笑う。
(忍ぶ川)

(69)二人きりになると、私達はどちらからともなくふっと黙り合った。 (風立ちぬ)

(70)「じゃあ、もう一本煙草をやるよ」「ありがとう。ちゃんと停めてあげますよ」ジヨルトと男は笑い合った。 (ぶどう)

② 両者が同時に同じ状態であり、その動作にはお互いの働きかけがないもの。

(71)どこの誰の親の病気が直ったとか、どこの誰は迷子の居所を知らせて貰ったとか、
若い者共が評判し合っていたのである。 (御持院原)

(72)私も一人、彼も一人だというのに、どうして淋しさをがまんし合って孤立しなければいけないのだ。 (言い寄る)

(73)けれども、表面上は何事もないようなふりをお互いがし合って、きょうまで暮らしてまいりました。 (錦織)

(74)小気味のよい程したたか夕餉を食った漁夫達が、「親方さんお休み」と挨拶してそろそろ出て行った後には、水入らずの家族五人が、囲炉裡の火に真赤に顔を照らし合いながらさし向いになる。 (生れ)

以下の例の「向きあう」という動詞は、次の「両者が同時に対面するもの」に分類してもよいのかもしれないが、例えば「壁と向きあってすわった」「家は川に向いあっている」のように一方が静止している状態のもので、もう一方がある動作をした結果「向きあう・向いあう」ものや、両方ともが静止しているものなどの場合、「同時に対面する」という動作は行なえないので、両者が同じ状態にあるもの、ということにした。

(75)「お待たせいたしました」と、頭をさげて、店員が離れていく。伸治はその女性と向き合うことになった。 (ドルシネア)

③ 主体の感情を両者が同時に表わすもの

相手に対する感情ではなく、各々の感情が同じであり、それを同時に表現しているものである。

(76)ながい牢浪と窮迫の果てに得たいまの地位を、せめて大名という華麗な言葉で飾ってお模とともによろこびあいたかったのである。(国盗り)

(77)そして両方がお互いに生れたことを感謝しあうと云うこともあり得ないことではない。(友情)

④ 働きかけ性のない動作を両者が同時に行い、その結果が一つの状態になっているもの

(78)二十年前、同じ東海道をきぬと二人、おそろしく込み合って十四時間余り立ちづめのまま善衛は上京し、それは生家へもどるためであった。(焼土層)

(79)船着場には既に小袖の衣服に大きな刀をさした侍たちや、見物人たちの群れがひしめきあっていた。(沈黙)

(80)僕は乗降台からプラットフォームと反対側の線路上に押し飛ばされ、誰か女の人らしい柔かい体の上に被さった。僕の上にも重い人体が被さった。右側にも左側にも人が重なり合った。(黒い雨)

(78)は、それぞれが汽車に乗り、その結果汽車が込み合っているという状態である。

(79)は人々がそれぞれ集まり、その結果「ひしめきあっていた」というまとまった状態になっているものである。

(80)は「押し飛ばされる」という同じ動作の結果、人が「重なり合う」というまとまった状態になったものである。

(81)吾一はしずかに腰をおろした。その時また、京造の目とがち合った。(路傍)

(82)しかし、記事の担当部門がち合っているだけに、鮎太が一番この男の存在を意識していた。剃刀のような冴えが、どんな記事の取扱いにも現われていた。(あすなろ)

(81)は必ずしも相手を見る、という動作でなくてもよいと思う。どこかを見る、という動作を両者がそれぞれ行ったときに偶然両者の目がち合うという状態になったものである。

(82)は両者の担当部門が偶然同じであり、その結果「がち合う」という状態になったものである。

(83)すでにそれは雨と風によってまるめられ、煉瓦はとけあって形を失うまでになり、一箇一箇を見わけることができなくなっている。(流亡記)

(84)この町の性格で、一般市民たちは外国人ととけ合い、中国人とも親しくつき合っている者たちが多く、かれらの検挙を知ると警察にまで釈放を嘆願にゆく者すらあったが、警察では、逆にそれらの市民を要注意人物として監視するようになった。(戦艦)

「とけあう」には(83)のように実際にとけあって、もとの形が変化しているものと、(84)のようにもとの形が変化していないものがある。

「まじりあう」「まざりあう」も、その結果がまとまったものになる。

(85)寒いくらいの風が音をたて、街の音と混じり合って部屋の中になだれ込んで来た。
(ぶどう)

(86)苦みが口一杯に拵がったが、それは瞬時のことで粉は水に交り合い苦もなく溶けていった。
(花埋み)

(86)の「交じりあう」は交じりあった結果、違う状態になっていることを表わしている。

⑤ 同時にそれぞれが独立した状態になり、その状態が集まって一つの状態になるもの

(87)あなたのあの事件以来、私の中には言うに言えないさまざまな鬱屈がかたまり合
って、私に別な人格をもたらしただのではないかと思わせるふしがあります。
(錦繡)

(88)吉村君、彼の世界と私の世界とは共通しあう部分がある。
(二十歳)

(89)お尻にまた新しい腫物が二つ殖え、それが隣合って瓢型にはびこりかけている。
(黒い雨)

(90)煉瓦はびつたりとくつつきあって、そのすきまには髪の毛一本入らない。
(世界)

(91)飛行機の両翼に赤と緑の航空灯がつき、それが、飛行甲板にたくさん重なりあ
って、美しい光景であったという。
(山本)

④に分類された「重なりあう」は、それぞれの独立した動作の結果「重なりあう」という状態になるのであるが、(91)は それぞれの状態が集まって一つの状態になるものである。つまり、赤と緑の灯りが出ている、それが集まり「重なりあう」というまとまった状態になっているのである。

B-2-2 働きかけでない動作を両者が交互に行うもの

(92)勝ちゃんが階下からウイスキーを盗んで来た。私製ジョニオーカア。暗がりでは二
人でウイスキーをビンの口から飲みあう。
(放浪記)

(93)僕の勤め先では夏に一週間ずつ代りあって休むんだ。
(草の花)

(92)は「ウイスキーをビンの口から飲みあう」は一本のウイスキーを交互に飲んでい
ることが文脈からわかる。

(93)の「代りあう」は一人が一週間休んだら、次に別の人が休み、またその次に外の

人が休む、ということなので、両者が交互に同じ動作を行う、ということではないが、同時に同じ動作をするということではないので、ここに分類した。

- (94) 一夜なりとも相会い、連歌など詠みあい、杯をもかわし、心ゆくまで語りあいた
いものでござる。 (国盗り)
- (95) 彼らはお互いの手帳の後ろに住所を—自宅の住所や入学した学校の寮の住所を書き
きあった。 (検家)
- (96) ところが戦乱の世で、たがいに一城のあるじでは共に会って語ることができず、
手紙でやりとりし、連歌も手紙の交換で作りあっている。 (国盗り)

(96)の「作りあっている」は「手紙でやりとりし」という文脈から、連歌を作りそれを手紙に書いて、交互にやりとりしていることがわかる。

3 最後に

以上、相互動詞「～あう」について、相互の働きかけの有無という観点から分類を試みた。しかし、下位分類の時間にしてもその長さは短かったり長かったりするだろうし、また、繰り返しにしても、連続の繰り返しもあれば、ある一定期間をおいての繰り返しもあると思われるが、以上の分類を一覧表にすると以下のようになる。

相互の働きかけの有無		時間	用法
A 働きかけがある	相互の働きかけがある (A-1)	同時 (A-1-1)	①両者の働きかけが物理的
			②観念的に働きかける
			③物理的に働きかけた結果、一つの状態になっている
			④相手との関係を表わしている
			⑤話す類のもの
			⑥相手を見ることを表わしている
			⑦両者が対面するもの
			⑧相手に対する感情を表わしている
			⑨相手から離れることを表わしている
		交互 (A-1-2)	①物理的に働きかける
			②観念的に働きかける
			③連絡をとりあう
			④話す類のもの
			⑤精神的に働きかける
		繰り返 し (A-1-3)	
B 相互の働きかけがない	同一の対象に向って働きかける (B-1)	同時	①対象に向って両者で同じ動作をする
			②対象を両者で二分する

		③対象を両者で共有する
働きかけで ない動作を 両者が行な う (B-2)	同時 (B-2-1)	①物理的な動作
		②両者が同じ状態である
		③主体の感情を両者が表すもの
		④それぞれの動作を行なった結果が一つの状態になっているもの
		⑤それぞれの状態が集まって一つの状態になっているもの
	交互 (B-2-2)	

参考文献

- 菊池康人 1991 「「XとYが(は)」と「Xが(は)Yと」一用法の整理と言語学的な解析」『東京大学留学生センター紀要』1:15-69
- 仁田義雄 1974 「対称動詞(Symmetrical Verb)と半対称動詞(Meso-symmetrical Verb)と非対称動詞(Anti-symmetrical Verb)」『国語学研究』13:56-68 東北大学文学部国語学研究室
- 姫野昌子 1999 「「～あう」と「～あわせる」」『複合動詞の構造と意味用法』pp143-171 ひつじ書房

出典

「向い風」「上野谷中殺人事件」「女坂」「闇のよぶ声」「妻たちの二・二六事件」「言い寄る」「中年の目にも涙」「驟り雨」「贈り物」「うしろ姿」「ちきしょう」「人殺し」「朝焼け」「遅いしあわせ」「運の尽き」「捨てた女」「泣かない女」以上「驟り雨」の中から）「蟬しぐれ」「ささやく河」「時雨のあと」(「秘密」「闇の顔」「意気地なし」「果し合い」「鱗雲」「雪明かり」以上「時雨のあと」の中から)「男のポケット」「返事はいらない」(「ドルネシアによろこそ」「言わずにおいて」「聞こえていますか」「裏切らないで」「私がついてない」以上「返事はいらない」より)「錦繡」「葡萄と郷愁」CD ROM 「新潮 100」より